

熊谷市立江南文化財センター テーマ展

わが街熊谷遺跡めぐり

ごんげんざかにはにわかまあとぐん

権現坂埴輪窯跡群 ～昭和39年調査～

会期：令和8年1月5日（月）～6月30日（火）

会場：熊谷市立江南文化財センター ホール展示ケース

発掘現場から

文化力
POWER OF CULTURE

1. はじめに

今回の展示は、平成21年（2007）5月に熊谷市へ移管された、昭和39年（1964）10月に早稲田大学の大川清氏が学術調査を実施した、熊谷市千代に所在する権現坂埴輪窯跡群出土資料を紹介します。

2. 権現坂埴輪窯跡群の概要

権現坂埴輪窯跡群は、熊谷市千代の、標高51m前後の江南台地北縁崖線部に位置する古墳時代後期（6世紀後半）の埴輪窯跡群です。遺跡のほぼ中央の開析谷を挟んで、東群と西群に別れて埴輪窯跡が分布しています。これまでの発掘調査で、埴輪窯・粘土採掘坑・工房跡と推測される竪穴住居跡が確認されており、県北地域に分布する古墳に、埴輪を供給していた遺跡です。

- ・第1次調査：昭和37年（1962）8月20日～24日にかけて、小沢国平氏が、東群の埴輪窯跡3基を調査。
- ・第2次調査：昭和39年（1964）10月10日～20日にかけて、大川清氏が、第1次調査地点に隣接して、7基の埴輪窯跡を調査。
- ・第3次調査：平成3年（1991）江南町千代遺跡群発掘調査会が、西群の埴輪窯跡10基余を確認して現状保存とし、工房跡と推測される竪穴住居跡2軒を調査。



権現坂埴輪窯跡群全体図

3. 第2次発掘調査の目的とその後の経緯

昭和39年(1964)、早稲田大学考古学研究室に所属していた大川 清氏は、権現坂埴輪窯跡群の学術調査を実施しました。

調査の目的は、「現在盗掘のための穴が各所にあり、このまま放置すれば貴重な埴輪窯址が破壊されるおそれがある。私は関東地方におけるハニワ窯業の実態の研究を進めてきたが、本遺跡が破壊に遭っていて遠からず資料的に無価値となる可能性がある。したがって、小規模ながら今後この窯業遺跡の実態の研究を継続実施すべく今回第一次調査として着手するものである。」と、昭和39年9月9日付で埼玉県教育委員会に提出された、埋蔵文化財発掘届に記載されています。

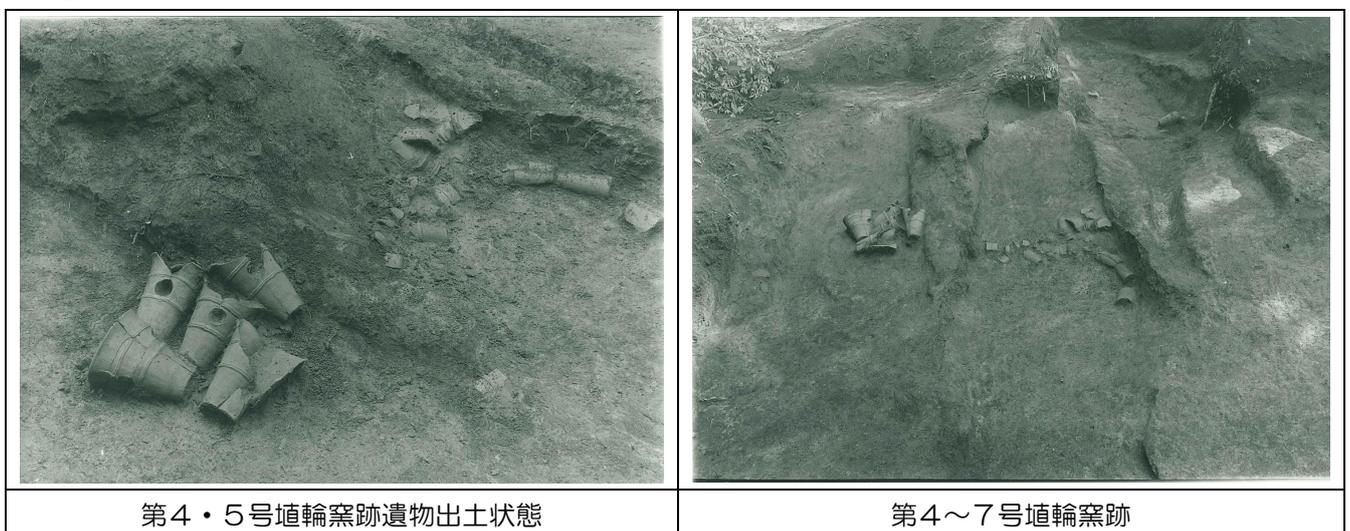
その後、報告書の刊行を準備していましたが、昭和40年(1965)大川氏は東邦大学へ転出、昭和42年(1967)には国土舘大学へ転出し、出土遺物も同氏とともに移動しました。さらに昭和54年(1979)11月に日本窯業史研究所を設立すると、同研究所の管理となりました。

しかし、その後も報告書は刊行されず、昭和44年(1969)に学研から刊行された『古墳と神々』に、写真のみが紹介されました(下写真右)。大川氏が平成18年(2004)亡くなったことを受け、同研究所では、大川氏の遺品整理を行う中で、同研究所が関与していない資料については、本来の管理者である自治体へ返却する方針を決め、平成21年(2007)熊谷市に資料が移管されました。移管された資料は、以下のとおりです。

- ・権現坂埴輪窯跡出土遺物(埴輪・土師器等): コンテナ17箱
- ・発掘測量図面: 7葉
- ・写真: ガラス乾板11枚・白黒紙焼写真39枚

4. ガラス乾板写真

ガラス乾板写真は、写真乳剤を無色透明のガラス板に塗り感光剤として撮影したものです。フィルムカメラが普及しはじめる昭和30年代から徐々に姿を消した写真技術で、今回の発掘調査では、11枚のガラス乾板写真が撮影されています。ガラス乾板は富士フィルム株式会社製で、大きさは12×16.5cm、シートフィルム換算で4×5インチサイズよりも大きい、大判サイズです。



ガラス乾板写真

5. 第2次発掘調査の概要

遺構測量図面及び遺物注記には4号～10号の記載があり、7基の埴輪窯を調査したことがわかります。小沢国平氏の第1次調査の遺構番号（第1～3号窯跡）に続けて窯番号を付けたものと思われます。

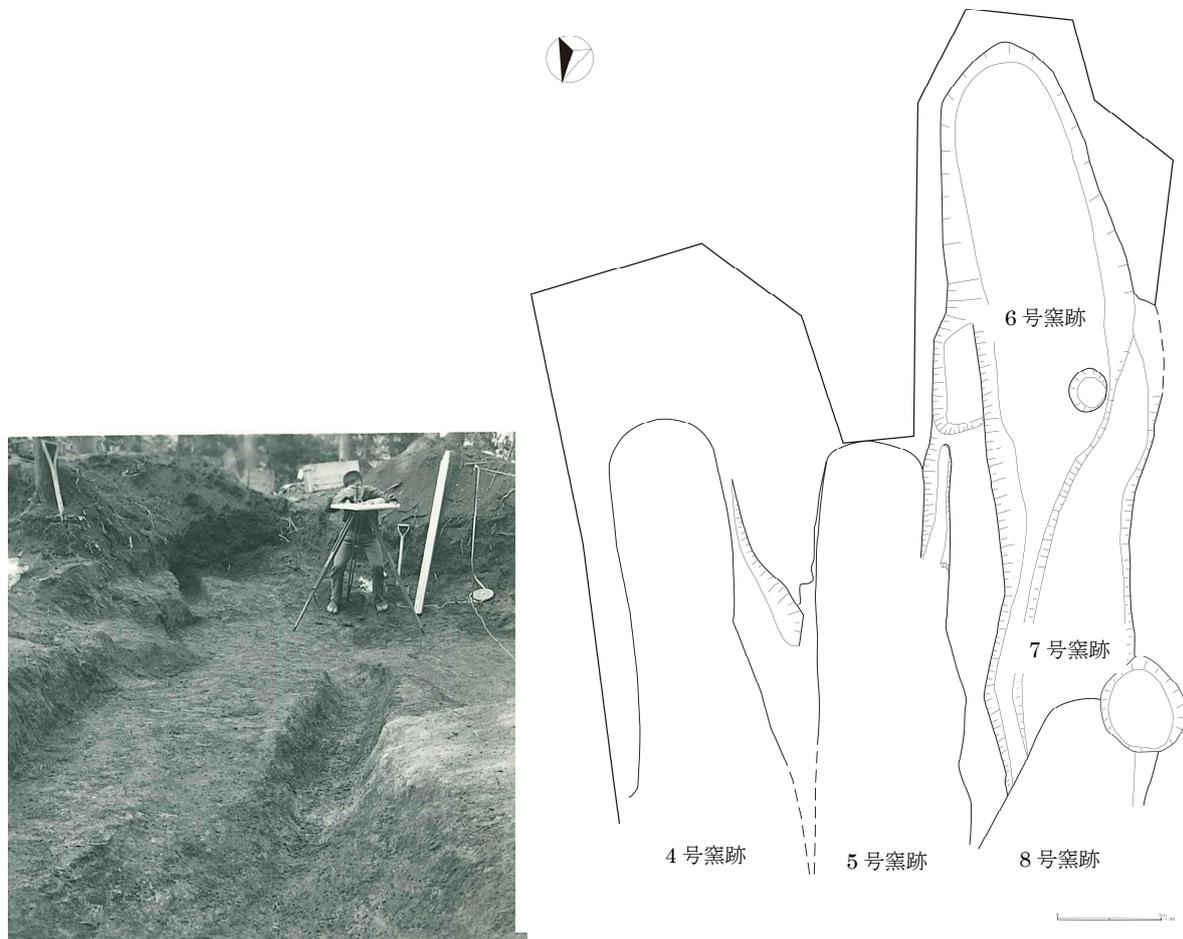
遺物に注記のある資料から、各窯跡から出土した遺物は次のとおりです。

- 第4号窯跡：完形に近い円筒埴輪 5 個体
- 第5号窯跡：円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、形象埴輪（馬）
- 第7号窯跡：円筒埴輪
- 第9号窯跡：円筒埴輪、形象埴輪（人物・馬）
- 第10号窯跡：形象埴輪（桂甲武人・人物）
- 出土遺構不明：猪形埴輪、馬形埴輪、巫女埴輪、人物埴輪、桂甲武人埴輪、土師器（はそう・埴・小壺）、石棒等

遺物の時期は、概ね古墳時代鬼高Ⅱ式期の6世紀後半と判断されます。

土師器は、出土遺構が不明ですが、胎土が埴輪と類似しており、埴輪窯で一緒に焼成された可能性も考えられます。

石棒は半分以上欠損していますが現存長 31 cmを測る大型品で、縄文時代中期のもので、他遺跡の出土品が混入した可能性もありますが、埴輪窯跡群（東群）の南側は、崖線部付近まで縄文時代中期の集落跡が広がっていることが確認されており、石棒の廃棄後、埴輪窯が埋没する過程で覆土中に混入したものと推測されます。



昭和39年権現坂埴輪窯跡（第4～8号）調査測量図・調査風景写真

		
第4号窯跡出土円筒埴輪	第4号窯跡出土円筒埴輪	第7号窯跡出土円筒埴輪
		
大型円筒埴輪	猪形埴輪	馬形埴輪
		
巫女埴輪	人物埴輪	第10号窯跡出土人物埴輪
		
土師器 はそう	土師器 碗	石棒

6. 大川 清（1925-2004）氏の略歴

考古学者。静岡県生まれ。昭和26年（1951）早稲田大学第一文学部史学科を卒業し、昭和29年（1954）早稲田大学大学院文学研究科芸術学専攻修士課程を修了。昭和40年（1965）東邦大学助教授、昭和42年（1967）国土舘大学助教授、昭和52年（1977）同大学教授となる。昭和54年（1979）（株）日本窯業史研究所を設立し、昭和59年（1984）「古代造瓦組織の研究」により、早稲田大学から文学博士の学位を授与される。

	<p>令和8年1月5日発行 編集・発行：熊谷市立江南文化財センター （熊谷市教育委員会 社会教育課 文化財保護係） 電話：048-536-5062</p>	
		熊谷デジタルミュージアム